川崎医療福祉学会誌　Vol. 33　No. 2　2024　249－259

資　料

架け橋期における幼児の音楽活動と小学校音楽科の指導に関する一考察
―小学校第一学年の教科書で取り上げられている教材を例として―

伊達希久子[*1]　青井則子[*1]　橋本勇人[*1]　中川智之[*1]　岡正寛子[*1]

要　　約

本研究の目的は，幼保小の架け橋期における2年間（幼児教育施設の年長から小学校1年生の2年間）の教育に携わる人材の効果的な育成を図るために使用できる音楽表現に関わる資料を作成することである．そのため，小学校第1学年で使用されている代表的な2社の教科書を学習ごとに比較検討した．音楽表現に関する「聴く」「感じる」「表現する」という要素を元に，音楽表現の手段と活動内容について分析した結果，楽しさを感じられる遊びを取り入れた活動を通して学習を進めていることを確認した．その上で，架け橋期の幼児・児童と関わる保育者と小学校教諭に求められる力には，音楽に関する基礎的な知識・技術をもっておくこと，幼児・児童を理解したうえで，楽しみながら音楽をする意識を大切に，指導・支援することが求められと考える．

1．緒言

本研究の目的は，幼保小の架け橋期における2年間（幼児教育施設の年長から小学校1年生の2年間）の教育に携わる人材の効果的な育成を図るために使用できる音楽表現に関わる資料を作成することである．

近年，幼児教育と小学校教育の円滑な接続の必要性が認識されており，平成29年3月の「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」の3要領・指針の改訂（定）においても,「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示されるなど，その重要性が示されている[1-3]．また,「小学校学習指導要領」においても，総則や各教科において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について記載され，学校段階間の接続を図るよう示されている[4]．

加えて，文部科学省では，令和4年度から，全国的な架け橋期の教育の充実とともにモデル地域における実践を並行して集中的に取り組む「幼保小の架け橋プログラム」が推進されている[5]．令和5年2月27日には，中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会により「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について―幼保小の協働による架け橋期の教育の充実―」[6]が取りまとめられた．

ここで言われる「架け橋期」とは，上述のとりまとめ[6]に示されている通り,「幼児教育と小学校教育の教育課程の構成原理や指導方法等に様々な違いがあるため，幼保小の教職員が相互理解を図って円滑な接続を実現し，それぞれの教育を充実するためには，数か月程度の短い期間では不十分であり，長期にわたって取り組むことが必要」（p.2）であり，「『架け橋期のカリキュラムの作成及び評価』（年度単位）の実効性の点から,幼児教育施設の年長（5歳児）から小学校1年生の2年間」（p.2）を指している．さらに，このとりまとめ[6]では「架け橋期の教育の質保障のために必要な人材育成等」として「幼児教育と小学校教育の双方に精通する人材」（p.21）が示されており，今後の幼児期の教育及び小学校教育に関わる人材には，幼児教育と小学校教育の双方

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　子ども医療福祉学科
（連絡先）伊達希久子　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-mail : date@mw.kawasaki-m.ac.jp

の教育について学修することが求められていると言えよう.

既に様々な取り組みが進められているが，音楽表現に注目すると，幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の比較[7,8]，教育教材に関する研究が主になされている．教材研究としては，わらべうた[9]，楽器[10]，歌唱[11]，鑑賞教材[12,13]など多岐にわたり，それぞれ着目する対象が異なっている．そのなかで，小学校音楽科の教科書を分析の対象としている研究として，岩佐と堀内[14]の研究と坪井[15]の研究を挙げることができる.

岩佐と堀内[14]は，教育芸術社の第1学年の教科書の内,「歌唱」「器楽」「鑑賞」の各分野で最初に示されている1教材を対象として，幼児教育で育成を目指す姿や幼児教育で扱う時の留意点，小学校音楽科で扱う時の留意点を考察した上で，それらの教材と幼児教育の5領域及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）との関連について検討している．岩佐と堀内[14]は，表現および鑑賞の学習において共通に必要となる「共通事項」として小学校学習指導要領[4]に示されている「音楽を特徴付けている要素」11項目と「音楽の仕組み」4項目が，教育芸術社の音楽科教科書では，各題材の中で複数の観点を同時に扱っていることを指摘している[15]．加えて，岩佐と堀内[14]は，花輪らの研究[16]を基に，表現の第一に「音を聞く」ことがあることを指摘し，小学校音楽科の導入期では特に聞いて，触って，感じるという時間を多くとることの大切さを指摘している[†1].

「幼児の音楽感受と身体表現」をテーマに研究を進めている坪井[15]は，小学校音楽科の教科書として採択されている2社（教育芸術社，教育出版）の第1学年の教科書の内，第1学年始めの4月に取り扱われる題材と教材を対象として，学習指導要領に示されている内容を視点として分析し，幼児期から小学校への接続において必要な資質や能力について考察している．坪井[15]は，音楽を聴き身体を動かす「音楽を身体感覚で感受する」ことを重視しており，2社（教育芸術社，教育出版）ともに小学校音楽科への接続（導入）に，音楽を聴いて身体を動かす（体感）教材を採用していることを指摘している．しかしながら,「すでに決まった『踊り』に基づいて体を動かす」（p.118）教育芸術社と,「音楽を聴いて，それに合わせた動きを各々が即時反応的に行う」（p.118）教育出版とで，その取扱いが異なることを指摘している[15].

これらの研究は，幼児期から小学校接続期にかけての音楽表現や音楽活動について検討する際に示唆を与えるものとなっているが，第1学年の年度当初の教科書分析に留まっており，小学校第1学年で取り扱われる1年間全ての学習の内容の詳細を分析するには至っていない．また上述の「音楽を体感できる」体験や資質･能力の重要性を指摘する坪井[15]は,「幼児教育において，音楽に身体動作が加わるときは，大抵決められた振り付けの「踊り」となることが多い。そうした子ども達にとって，歌詞のない音楽に，自由な身体表現を求めるのは，大変難しいことである」（p.120）と述べているものの，幼児期の音楽を体感できる具体的な方法については述べられていない.

そこで，本論では，小学校第1学年の音楽の教科書に記載されている全ての題材や教材を保育者養成に携わる教育者・研究者が分析するとともに，架け橋期における音楽表現や音楽表現に携わる人材（保育者・小学校教諭）に求められる力について考察することにより，保育者・小学校教諭の育成に活用可能な資料を作成する.

２．方法

本研究は，小学校音楽科の教科書として採択されている全ての教科書を分析の対象とした．具体的には，教育芸術社の「小学生のおんがく１」[17]と教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの１」[18]を分析の対象として，各学習の内容，教科書の表記の仕方を比較，分析した.

筆者らは，音楽表現には,「①聴く」「②感じる」「③表現する」という主となる要素があり，それに付随した要素があると考えている．これは，前述した通り，岩佐と堀内[14]においても同様と考えられる．また，福岡市教育センター音楽科研究室[19]においても同様の考えに関する記述が見られ,「児童が感性を働かせて，音楽を形づくっている要素を聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さ，美しさなどを感じ取ることや，感じ取ったことをもとに，どのように表すか思いや意図をもち，思考・判断しながら音楽表現を深める学習を進めることが求められている」（p.1）ことが示されている.

筆者らは，前述した「①聴く」には，自分の歌う声や楽器を奏でた音を聴くこと，他者の出す音，周囲の音を聴くことなどが含まれ,「②感じる」には，様々な音のうち音楽の3要素となるリズム，メロディ，ハーモニーを感じとること，情景や曲想を感じることが含まれると考えている.「③表現する」とは，歌ったり，楽器を弾いたり，身体を手段として音を表出したりするものであり，その表現の基礎となる技能として読譜を指摘することができる．こ

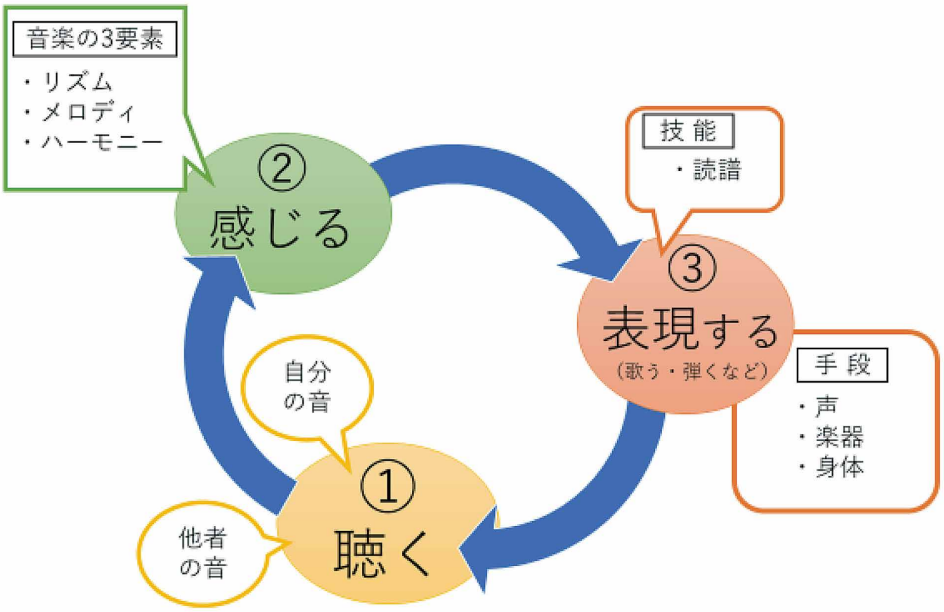

図１　音楽表現に関する諸要素の関連

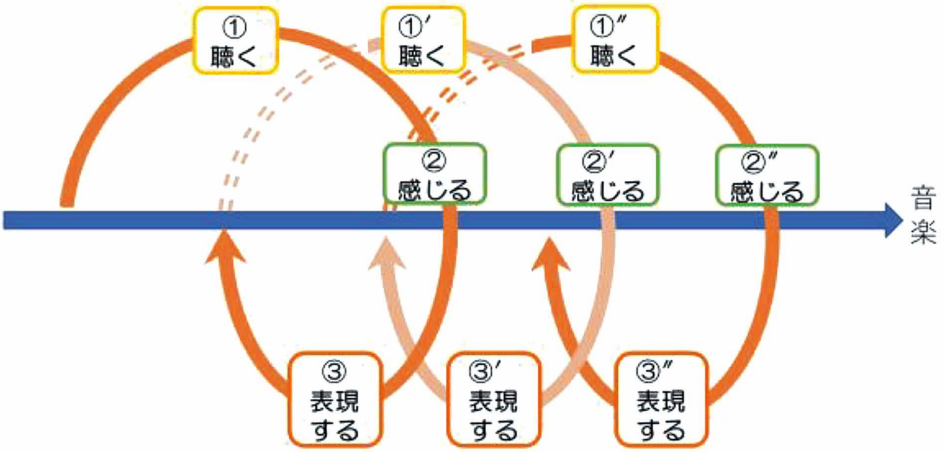

図２　時間芸術を構成する音楽表現のサイクル

れらの音楽表現に関する諸要素は，独立したものではなく，各要素が関連しあいながら，音楽を形成するものである．また，この諸要素の関連は，1回で完結するものではなく，経過する時間の中で繰り返しサイクルを描きつつ表現が連なっていくことで，時間芸術としての音楽を成立させる．これらの考えを図示したものが，図1・2である．

本研究では，この音楽表現の関連性に関する視点を基に，前述した2社の小学校第1学年の音楽科の教科書[17,18]を比較・検討した．加えて，各教科書に記載されている学習に音楽表現の手段と具体的な活動が，どのように含まれているかを分析した（表1･2）．これらの分析は，筆者の内，保育者養成校における音楽関連科目の担当者2名（両名とも中学校・高等学校教諭普通免許状（音楽）を保持）が担当した．分析作業は，2023年2月16日～3月15日に実施した上で，一定の期間を空け，2023年8月28日～9月7日，11月25日～28日に確認・修正を実施した。

分析は，目次に掲載されている「題材」や「学習のめあて」[†2)]を参考にしながら，学習ごとに行った．学習は，ほぼ見開き2頁を単位に構成されており，表1･2には，主な「学習の内容」，記載されている「教材名」「使用する楽器」を示した．加えて，前述の音楽表現に関する諸要素「聴く」「感じる」「表現」の内，その学習において特に重要視されているものが判別できるよう，重要度の高いものに「○」を付

し，その学習においては重要度が高いというほどではないものには「・」を付し区分して表した．たとえば，共通教材である「ひらいたひらいた」では，友達と輪になって手を繋ぎ，蓮の花をイメージして開いたりつぼんだりしながら音楽に合わせて歌いながら身体を使って表現する遊びが2社[17,18]ともに掲載されている。この活動は身体表現を主とする活動であるため「表現」に「○」を付し,「聴く」「感じる」の重要度については「・」とした．また，教育芸術社[17]の「きにいったおとをみつけてうたといっしょにならしましょう」（pp.52-53）では，好きな楽器を選び自由に鳴らす活動と，友達が鳴らしている音を聴く活動が掲載されているため,「聴く」「表現」に「○」を付し,「感じる」の重要度については「･」とした．

また，音楽表現の手段について,「声」「身体」「楽器」に分類し，技能として「読譜」を加え，重要度の高いものには「○」を，記されているが重要度がそれほど高くはないものには「･」を付した．「声」には，歌うことだけでなく，言葉でリズムを表現することも含んだ．歌う活動が主となっているものには「○」を,「身体」「楽器」での表現が主となっており合わせて歌う程度のものや言葉でリズムを表現する活動には「･」を付した．「身体」は,手をうつ，動きをつけるなど身体で表現することとした．音楽に合わせて手をうったり,打楽器を使用したり,踊ったりなどする活動には「○」を付し，からだをゆらす程度のものは「・」を付した．鍵盤ハーモニカをふく活動には,「○」も「･」も付していない．「楽器」が使用されている学習には,「使用する楽器」の欄に，その学習で使用している楽器が分かるように標記した．楽器の音を聴くだけの活動や，最後に少しだけ楽器を使う活動については,「・」とした．「読譜」については,小学校1年生の時点では,音符ではなく，言葉や形でリズムや音名を図示する程度の水準であり，楽譜を読んで表現する力とまでは言えないものであったため，全て「・」で記した．

分析を進める中で,第1学年の教科書には「遊び」や「まねる」「つくる」といった活動に関する表記が多いことに気が付いた．そこで,各学習の中に「遊び」「まねる」「つくる」活動が含まれているかどうかを分析し，含まれている場合にはその学習の中での重要度を上述の通り「○」と「・」とで区分して記した．具体的には,「遊び」については，その活動単独でも幼児期の遊びとして成立するような「遊び」の要素の強いものには「○」を付し，音遊びやリズム遊びなど，音楽に関する学びに遊びの要素を取り入れ教科書に「遊ぶ」と表現されているようなものには「・」を付した．「まねる」には，先生がすることを「まねる」，友達の演奏や動物の鳴き声を「まねる」などの活動が含まれる．「まねる」については，まねることが主となる活動は少なく，重要度として，ほとんどの活動には「・」を付した．先生が歌うドレミをまねて鍵盤ハーモニカでふく活動や，先生のうつリズムをまねて様々なリズムを身体を通して経験する活動のみ「○」を付した．「つくる」には，音楽づくり（星空の様子を思い浮かべて音楽をつくりましょう，音をかさねて旋律をつくろう，等），リズムをつくる，自由に鳴らす，合奏などが含まれる．そのうち，音楽づくりやリズムづくりの学習として教科書に指定されているようなものには「○」を付し，例えば鍵盤を使って動物の鳴き声をまねしてみようといった，音の高さや長さ，強さを変化させる活動があるような場合には「・」を付した．

３．結果

３．１　教科書別の各学習に含まれる音楽表現に関する諸要素と表現手段，活動内容

教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]と教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]の各学習に含まれる音楽表現に関する諸要素と表現手段，活動内容等について整理したものが，表1・2である．

３．２　教育芸術社と教育出版の内容の相違

これらの2社は，いずれも幼児期を振り返る内容を取り入れており，その手段として歌を歌ったり，踊ったりといった遊びを取り入れ,「声」と「身体」を同時に使う内容となっていた．しかし幾つかの点で，教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]と教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]の内容に違いと特徴がみられた．

同じ「わらべうた」を用いていても，その位置づけや学習の時期が異なっていた．教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]は，幼児期の振り返りとしての位置づけで教科書の最初の方に提示されているのに対し，教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]は少し複雑な活動内容を取り入れ，小学校で学ぶ音楽表現として位置付けられ，日本の歌を楽しむ学習として教科書の最後の方に示されていた．

また，教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]のみに示されている内容として，生活の中で音を聴くという学習が取り入れられており，学校内の音や自然の音などを聞き取り，声で表現して遊ぶ活動が示されていた．

鑑賞教材については，教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]は「聴く」「感じる」だけの活動が主になっ

表１　各学習に含まれる音楽表現に関する諸要素と表現手段，活動内容（教育芸術社）

教育芸術社															
題材名	頁	学習のめあて	学習の内容	教材名	使用する楽器※	特に重視している音楽表現に関する諸要素			表現する手段・技能				活動		
									手段			技能			
						聴く	感じる	表現	声	身体	楽器	読譜	遊び	まねる	つくる
①うたっておどって なかよくなろう	p6.7	みんなでいっしょにうたって ともだちをつくりましょう	絵の中から歌を見つけてみんなで一緒に楽しく歌う					○	○				・		
	p8.9	ともだちといっしょにおどりましょう	みんなで身体を動かして遊びながら歌う	（鑑）セブンステップス チェッチェッコリ				○	・	○			○		
	p10.11	みんなであそびながらたのしく うたいましょう	ひらいたりつぼんだりしてみんなではすの花をイメージして遊ぶ	（共）ひらいたひらいた		・	・	○	○	○			○		
②はくをかんじとろう	p12.13	おんがくにあわせてからだを うごかしましょう	音楽に合わせて手でリズムをうったり歩いたりする	（鑑）さんぽ		○	○	○	・	○					
	p14.15	たんたんうんのリズムをうちましょう	カスタネットの持ち方とうち方を学んでリズムをうつ	じゃんけんぽん	カ	・	○	○	・	○	○		・		
	p16.17	たんたんうんのリズムであそびましょう	リズムに言葉をあてはめて遊ぶ			・	○	○	○	○			○		・
	p18.19	うたにあわせてリズムをうちましょう	歌いながらリズムを手やカスタネットでうつ	みんなであそぼう	カ	・	○	○	・	○	○		・		
③はくにのって リズムをうとう	p20.21	おんがくにあわせてリズムを うちながらききましょう	音楽を聴きながら手やカスタネットでリズムをうつ	（鑑）しろくまのジェンカ	カ	○	○	○	・	○	○	・			・
	p22.23	かたつむりによびかけるような きもちでうたいましょう	明るい声で歌う　歌に合わせてリズムを打つ	（共）かたつむり		○	○	○	○	○					
	p24.25	たんとたたのちがいにきづいて リズムをうちましょう	タンブリンの持ち方と打ち方を学んでリズムをうつ	ぶんぶんぶん	タ	・	○	○	・	○	○				
	p26.27	たんとたたをつかってことばで リズムをつくりましょう	★音楽づくり　言葉に合わせてリズムをつくる			○	・	○	○	○					○
	p28.29	うみのようすをおもいうかべながら うたいましょう	歌に合わせて身体を動かしながら歌う	（共）うみ		○	○	○	○	・				・	
④みのまわりの おとにみみをすまそう	p30.31	みつけたおとでよびかけあいましょう	★音楽づくり　音をみつけて声で表す			○	○	○	○				・	・	○
⑤どれみと なかよくなろう	p32	けんばんハーモニカと なかよくなりましょう	けんばんハーモニカの持ち方とふき方		け			○			○				
	p33	けんばんハーモニカの おとをききましょう	みつばちのいろいろな様子を思い浮かべながら聴く	（鑑）みつばちハニーのぼうけん		○	・								
	p34.35	けんばんハーモニカで いろいろなおとをみつけましょう	音の強弱　長短　高低をイメージしてけんばんハーモニカをふく	たのしくふこう	け	○	○	○	・		○				
	p36.37	どとそのばしょをみつけましょう	けんばんハーモニカのどとその音を覚える	どんぐりさんのおうち	け	○	○	○			○	・			
	p38.39	どれみのばしょをおぼえましょう	どれみで歌ったり正しい指を使ってけんばんハーモニカをふいたりする	どれみであいさつ	け	・	・	○	・		○	・			
	p40.41	どれみふぁそのばしょをおぼえましょう	どれみふぁそのばしょを覚えてふいたり歌ったり先生の歌う音をまねたりする	なかよし	け	・	・	○	・		○	・		○	
	p42.43	おとのたかさにきをつけながら うたいましょう	歌詞やどれみでのびのびと歌う	（共）ひのまる		○	・	○	○			・			
⑥せんりつで よびかけあおう	p44.45	だがいのこえをききながら よびかけあってうたいましょう	★音楽づくり　まねっこ遊び　言葉をまねて音楽をつくる	やまびこごっこ		○	○	○	○				・	・	○
	p46.47	せんりつをつなげてあそびましょう	★音楽づくり　旋律のまねっこ　旋律をまねて音楽をつくる		け	○	○	○	・		○		・	・	○
	p48.49	せんりつがよびかけあうおもしろさを かんじながらききましょう	いろんな楽器の音色を聴く	（鑑）こうしんきょく		○	○								
⑦がっきと なかよくなろう	p50.51	いろいろなおとをみつけてならしましょう	おとさがし　楽器の持ち方と鳴らし方		ト・す・タ	○	・	○			○				
	p52.53	きにいったおとをみつけてうたと いっしょにならしましょう	好きな楽器でリズムを鳴らす	さがしてみようならしてみよう	カ・ト・す・タ	○	・	○	・		○				・
	p54.55	みみをすましてがっきのおとを ききましょう	曲の中に出てくる楽器の音を聴く	（鑑）シンコペーテッドクロック	ウ・ト	○	○	・			・			・	
⑧ようすを おもいうかべよう	p56.57	ほしぞらのようすをおもいうかべながら うたったりえんそうしたりしましょう	鉄琴のうち方を学ぶ	きらきらぼし	け・て	・	○	○	○		○	・			
	p58.59	ほしぞらのようすをあらわすおんがくを つくりましょう	★音楽づくり　場面をイメージして楽器で音楽をつくる		て・す・ト	○	○	○			○			・	○
	p60.61	かしからようすをおもいうかべて うたいましょう	歌詞の感じが伝わるように強弱や速度を工夫して歌う	はるなつあきふゆ		・	○	○	○						
⑨にほんのうたを たのしもう	p62.63	わらべうたをきいたりうたったりして あそびましょう	遊び方を覚えてみんなで楽しむ	（鑑）さんちゃんが （鑑）おおなみこなみ		○	・	・	・	・			○		
	p64.65	ともだちといっしょにあそびながら うたいましょう	手遊びをしながら歌う	おちゃらかほい		・	・	○	○	・			○		
⑩みんなであわせて たのしもう	p66.67	たがいのうたをききあいながら うたいましょう	強弱を工夫しながらかけあいを楽しんで歌う	あいあい		○	・	○	○					・	
	p68.69	うたごえとがっきのおとをあわせて えんそうしましょう	歌に合わせて合奏したり踊ったりする	とんくるりんぱんくるりん	け・タ・ト	○	・	○	○	○	○	・	・		・
	p70.71	たがいのがっきのおとをききあいながら えんそうしましょう	様子を思い浮かべながら歌ったり気持ちを合わせて合奏する	こいぬのマーチ	け・カ・タ・ト・す	○	・	○	・		○	・			・
	p72.73	こうしんきょくのたのしさをかんじとって ききましょう	音楽の変化に気付き身体を動かしたり手をうったりする	（鑑）ラデッキーこうしんきょく		○	○	○		○					

※楽器の略字を用いる（カ：カスタネット，タ：タンブリン，け：けんばんハーモニカ，ト：トライアングル，す：すず，て：てっきん，ウ：ウッドブロック）

表２　各学習に含まれる音楽表現に関する諸要素と表現手段，活動内容（教育出版）

教育出版															
題材名	頁	学習のめあて	学習の内容	教材名	使用する楽器※	特に重視している音楽表現に関する諸要素			表現する手段・技能				活動		
						聴く	感じる	表現	手段			技能	遊び	まねる	つくる
									声	身体	楽器	読譜			
［導入］	p2.3	どんなうたがあるかな	絵の中から知っている歌をみつけて友達と楽しむ					○	○				・		
	p4.5	おんがくにあわせてあるこう	音楽の速度を感じながら拍に合わせて手をうったり足踏みしたりする	（鑑）ゴーアンドストップ		○	・	○		○			・		
	p6.7	うたにあわせてかもつれっしゃになってあそぼう	歌の拍に合わせてみんなで歩きながらかもつれっしゃになって遊ぶ	かもつれっしゃ		・	・	○	・	○			○		
	p8.9	おんがくにあわせてからだをうごかそう	色いろな曲を聴いて動きをつけて表現する	（鑑）サンダーバード （鑑）なみをこえて （鑑）ﾋﾟﾝｸﾊﾟﾝｻｰのテーマ （鑑）ぞう （鑑）どうけしのギャロップ		○	・	○		○			・		
	p10.11	うたにあわせておはなになってあそぼう	はすの花をイメージして表現しながら歌う	（共）ひらいたひらいた		・	・	○	○	○			○		
	p12.13	わらべうたであそぼう	わらべうたを歌いながら友達と動きを合わせて遊ぶ	（鑑）おちゃらか　なべなべ		○	・	○	○	○			○		
	p14.15	うたにあわせてみぶりであそぼう	かたつむりの動きを付けて遊びながら歌う	（共）かたつむり		・	○	○	○	○			○		
①リズムとなかよし	p16.17	たんとうんのリズムであそぼう	手拍子と手合わせでリズムを打つ	ぶんぶんぶん		○	・	○	・	○			・		
	p18.19	ジェンカのリズムであそぼう	ジェンカのリズムを拍にのってうったり踊ったりする	（鑑）ジェンカ しろくまのジェンカ		○	・	○	・	○			・		
	p20.21	たんとうんでリズムをつくろう	リズムをまねっこしたり作ったリズムをつなげて音のリレーをする			○	・	○		○			・	○	○
	p22.23	たんとたたのリズムであそぼう	言葉のリズムに合わせて手をうつ　速度を工夫する	わくわくキッチン		○	○	○	・	○			・		
	p24.25	［おとのスケッチ］ことばのリズムであそぼう	★音楽づくり　いろいろな言葉をもとにリズムをつくって楽器でうつ		タ・カ・す	○	○	○		○	○		・		○
	p26.27	にっぽんのうた　みんなのうた	曲に合わせて身体をゆらしながら歌う	（共）うみ		・	○	○	○	・					
②どれみとなかよし	p28.29	どれみにあわせてからだをうごかそう	音の高さを感じながら音階どれみふぁそらしどの体操をする	（鑑）どれみのうた		○	・	○	・	○		・	・		
	p30.31	うたにあわせてからだをうごかそう	旋律の変化を感じながら音階体操をする	どれみのキャンディー		・	○	○	○	○					
	p32.33	［こんにちははけんばんハーモニカ］ どんなおとがするのかな	けんばんハーモニカで音の長短　強弱を変えたり 動物のなき声をまねしたりする		け	○	○	○			○			・	・
	p34.35	［こんにちはけんばんハーモニカ］ どのおとであそぼう	けんばんハーモニカのふき方　どを覚える	どこどこど　まほうのど	け	○	・	○			○	・	・	・	
	p36.37	［こんにちはけんばんハーモニカ］ どれみのおとであそぼう	けんばんハーモニカのふき方　どれみを覚える	あのね	け	○	・	○			○	・	・	・	
	p38.39	［こんにちはけんばんハーモニカ］ どれみふぁそのおとであそぼう	けんばんハーモニカのおさえ方　どれみふぁそを覚える	どんぐりぐり	け	○	・	○			○	・	・		○
③もりあがりをかんじて	p40.41	もりあがりをかんじてうたおう	曲の一番もりあがるところをみつけて歌う	（共）ひのまる		・	○	○	○			・			
④いいおとみつけて	p42.43	いろいろなおとをみつけよう	いろいろな楽器の鳴らし方を工夫する		ト・タ・シ・お	○	○	○			○		・		
	p44.45	がっきのおとでよびかけっこしよう	友達の鳴らす楽器の音を聴きあったりリズムを作ったりする	（鑑）こうしんきょく	ト・タ・す・カ	○	○	○			○			・	○
	p46.47	［おとのスケッチ］ねこのなきごえであそぼう	★音楽づくり 色々な声でねこの鳴き声を表す　まねっこ　よびかけっこ　リレーをする	（鑑）２ひきのねこのゆかいな うた		○	○	・	・				・	・	○
⑤きょくのながれ	p48.49	おんがくにあわせてこねこになっておどろう	曲の変化を感じてこねこになって踊る	（鑑）おどるこねこ		○	○	○		○					
	p50	おんがくにあわせてからだをうごかす	曲の変化を感じながら友達と身体を動かす	（鑑）おどるこねこ		○	○	○		○					
	p51	［めざせがっきめいじん］ おとのながさをくふうしてふこう	音の長さを変えてけんばんハーモニカをふく	すずめがちゅん	け	○	○	○			○	・			
⑥うたでまねっこ	p52.53	うたのまねっこであそぼう	２つの組にわかれて聴き合いながら楽しく歌う	もりのくまさん		○	・	○	○	・			・	・	
	p54.55	ことばのまねっこであそぼう	言葉をリズムにあてはめてつなげて歌う	フルーツケーキ	カ・す	○	・	○	○		・		・	・	
⑦みんなであわせて	p56.57	みんなでうたやリズムをたのしもう	２つのリズムを重ねたり強弱や速度で変化をつけたりする	（鑑）おもちゃのへいたい おもちゃのチャチャチャ		○	○	○	○	○			・		・
	p58.59	［おとのスケッチ］ほしのおんがくをつくろう	★音楽づくり　作った旋律をつなげて音を重ねて演奏する	きらきらぼし	け・て	○	○	○			○	・			○
［おんがくランド］ ［しりょう］ ［きせつのうた］															

※楽器の略字を用いる（タ：タンブリン，カ：カスタネット，す：すず，け：けんばんハーモニカ，ト：トライアングル，シ：シンバル，お：おおだいこ）

ていた。教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]は，「聴く」「感じる」活動に加え，曲想を感じ取るために歌ったり，身体を動かしたりする活動も取り入れられていた．

３．３　特に重要となる分類別の内容

①音楽表現に関する諸要素

「聴く」「感じる」は音楽表現において，欠かせないものである．そのため，ほぼ全ての学習において含まれている．各学習では，聴く活動に，音を併せたり，先生の拍に合わせたりといった活動が展開されていた．これは，先に述べた音楽表現における諸要素の構成（図1）と合致しているといえる．

②表現する手段・技能

表現する手段として，本研究では「声」（歌う，言葉を使ってリズムをつくる，等），「身体」（手をうつ，動きをつける，等），「楽器」（カスタネットや鍵盤ハーモニカ等を演奏する）と分類を行ったが，1つの手段だけではなく，複数を組み合わせての表現活動が多かった．具体的な学習活動としては，例えば，まず歌を歌い（声），次に拍を感じるために手をうち（身体），その後，カスタネットを用い演奏する（楽器）などの活動を行う．そして最後に声，身体，楽器を組み合わせて表現するというように，広がりをもった学習へと結びつけられていた．

次に，音楽表現の基礎となる「読譜」については，小学校1年生の時点では，音符ではなく，言葉や形でリズムや音名を図示し，児童が見て表現することを支援していた．これは，その後楽譜を読む力，読譜に繋がる内容と考えられる．しかし，2社の教科書では，その取り入れるタイミングは異なり，教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]の方が早く，前半のリズムの理解の学習の際に取り入れられていた．一方で，教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]では，中盤に鍵盤ハーモニカを使う学習において取り入れられていた．

③活動

「遊び」については，まねっこ遊びやリズム遊びといった内容の他，例えば教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]で見られたように，「どれみとなかよし」の題材に含まれる「どのおとであそぼう」といった学習の中で「リズムをかえてあそんでみよう」という呼びかけが記載されているところが見られた．これは，遊びを直接行うということよりも，遊びのエッセンスを加えることで，子どもがイメージをしやすく，難しさを感じることなく学習に繋げる工夫と考えられる．こういった工夫は，教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]の方が多かった．教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]については，小学校学習指導要領に示される目標の達成が意識されるよう，「おんがくにあわせてリズムをうちながらききましょう」など，各学習のめあてが教科書に明確に表現されていた．

次に，「まねる」ことについて，先生の手本をまねる活動は，教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]，教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]共に1か所程度と少なかった．一方で，友達の音を聴いて，良い所を「まねる」，動物の声を「まねる」といった活動は，複数箇所見られた．「まねる」という活動に関しては，小学校学習指導要領の第1学年及び第2学年の内容として，「範唱を聴いて歌ったり，階名で模唱したり暗唱したりする」活動や，「範奏を聴いたり，リズム譜などを見たりして演奏する」活動など先生の手本をまねる活動が示されている．しかし，実際の第1学年の教科書では，先生の手本をまねる活動は少なく，友達のする表現や動物の鳴き声のまねをする活動が示されていることから，第1学年でのこれらの活動は，第2学年以降の，先生による「範唱」や「範奏」を聴いて表現する活動の基礎となる位置付けと考えられる．

「つくる」については，即興的に旋律や言葉でリズムをつくったり，友達と音や声をつなげたり，様々な楽器の音やリズムを重ねたりする楽しさを経験する活動を2社ともに大切にしていた．また，「つくる」活動はその時間の授業の中で，様々な音楽的な活動をした後の，発展した活動として記されていた。「つくる」活動を通して，自分のイメージしたことや感じたことを表現する活動は第1学年ではまだ少ないが，自由に音や声を出す楽しさや，友達が思い思いに出す音や声でつくられた様々な表現の楽しさを味わう経験が，その後の豊かな音楽の表現活動に繋がっていく一助になると考えられる．

以上のように，教科書間に相違が見られるものの，習得できる資質・能力については同レベルのものになるよう，構成されていた．また，教育芸術社の「小学生のおんがく1」[17]と教育出版の「小学音楽おんがくのおくりもの1」[18]とも小学校第1学年の児童が教科書を見た際に，視覚的に内容をイメージでき学習に繋がる工夫がなされていた．また，各題材には「どうなるかな？」「やってみよう」などの活動を発展させるようなコメントも付け加えられていた．

４．考察

本論では，幼保小の架け橋期における2年間（幼児教育施設の年長から小学校1年生の2年間）の教育に携わる人材の効果的な育成を図るために使用できる音楽表現に関わる資料を作成することを目的とし

て，ここまで，小学校第1学年の音楽の教科書として採択されている2社の教科書を対象に，記載されている題材や教材を分析してきた．ここでは，先行研究を交えながら考察をしていく．

先ず，小学校第1学年の音楽の2社の教科書に記載されている題材や教材について，年度当初だけではなく1年間の題材や教材を対象に分析したことが本研究の特徴である．分析の結果，遊びを取り入れた活動が多く採用されていることを示すことができた（表1・2）．

また，身体を用いた表現活動が多く取り入れられており，これらの活動は，特に接続期を含む第1学年の前半に多く取り入れられていた．2社を比較すると，身体を用いた表現活動や遊びを取り入れた活動は，教育出版[18]の方に多く見られた．教育出版[18]では，身体を用いた表現活動は学習全体の半数以上で取り入れられており，遊びの要素を取り入れた活動は全体の3分の2を超える学習で採用されていた．坪井[15]は，教育出版[18]に掲載されている4月に扱う身体を動かす活動は，音楽を聴いて即時反応的に体を動かすことが特徴であることを指摘しており，本研究の結果は坪井の研究結果と合致するものと言える．教育出版[18]の方が，音楽を体感できる学習に対する意識が高いと考えられよう．

これらの結果から，特に幼児期を中心とした架け橋期においては，「音楽」＋「身体」＋「遊び」の要素で構成される音楽表現活動が重要となると考えられる．幼児期において，たとえば小学校第1学年の音楽科教科書に導入として記されているような「ひらいたひらいた」[17,18]や「かもつれっしゃ」[18]のような音楽に合わせて身体を動かす活動を経験しておくことが，小学校入学後の音楽科の学習に繋がっていくと考えられる．

他方，小学校第1学年の音楽科教科書では，「まねる」活動についても複数取り扱われていた．ここに，幼児期における「音楽」＋「身体」＋「まねる」の要素で構成される音楽表現活動の可能性が指摘できる．坪井[15]は，すでに決まった「踊り」に基づいて体を動かす活動は教育芸術社[17]に掲載されている4月に扱う学習に含まれている特徴であり，前述の教育出版[18]に掲載されている音楽を聴いて即時反応的に体を動かすことが特徴の学習とは区別して捉えている．「音楽」＋「身体」＋「まねる」の要素で構成されるその他の音楽表現活動として，鳥越[20]は，輪になって向かい合って座り，「リーダー発信でおへそを上下に動かしたり，左右に体を揺らしたり，リズムに合わせて手拍子をしたり，床をたたいたりすることで，全体の場も和やかになり，抵抗なくリズムの世界に入っていくことができる」（p.184）といった活動を紹介している．リズムに合わせた身体表現活動が苦手な子どもにとっては，先生やリーダーのまねをすることにより活動が容易になると考えられ，音楽の流れる空間で先生や友達のまねをしながら身体を動かす活動を幼児期に経験することも大切であろう．鳥越[20]は，苦手な子どもには定型の振りから入ってもよいと考えており，慣れてきてから「自由に即興的で踊るパートを組み込んでいく」[20]（p.185）方法も提案している．

次に，小学校第1学年の音楽の教科書に記載されている学習について，様々な要素が含まれているかどうか，その重要度を交えて分析したことが本研究の特徴の1つである．分析の結果，各学習には様々な要素が含まれており，その組み合わせも多様なものであった．これは，本研究で視点とした要素とは異なるものの複数の観点が各題材に含まれていることを確認した岩佐と堀内[14]の研究と同様の結果であると言える．本研究は，岩佐と堀内[14]よりも細かい学習を単位として分析したものであり，各学習には多様な要素が同時に扱われていることと，重視されている要素が様々であることを示すことができた．架け橋期の音楽活動を指導する教諭・保育者にとっては，それぞれの音楽活動の際にどの要素を重視して活動を進めていくのかしっかりと意識することが大切になると考えられる．

最後に，架け橋期における音楽表現活動や，音楽表現に携わる人材（保育者・小学校教諭）に求められる力について考察していく．筆者らは，「聴く」「感じる」「表現する」の3つの要素の中で最も大切なことは「聴く」であると考えている．それは，音楽の表現が始まる最初の要素であるだけでなく，例えば，保育者・小学校教諭であれば，日常生活の中で幼児・児童の声を聴き，その日の体調の変化に気が付き優しく声をかけることができたり，日常生活の中で様々な音を聴き，季節の訪れや天候の変化などに気が付き生活や行動を変化させたりすることができることにも繋がるからである．

小学校第1学年の音楽活動として，身近な音や自然の音などを聞き取り，声で表現して遊ぶ活動が取り入れられていた通り，架け橋期の幼児・児童にとっても，自然の音や生活の音を含め普段からの音をしっかりと聴く経験ができるようにすることが大切であろう．架け橋期の幼児・児童を指導する保育者・小学校教諭は，身近な音に興味をもって聴いたり，様々な音を聞き比べたりできるよう，声かけや環境の工夫をすることが大切となる．音楽の教科書に示されていたまねっこ遊びも，楽しみながら意識

して聴く経験を作り出していると言えよう．

「感じる」「表現する」については，双方が連動した活動の中で指導していくことが考えられる．音を聴きどう聴こえたのか，感じたのかを表現したり，友達の感じたイメージや思いを聞いて共有したりする経験も大切となる．教科書には，感じたイメージや思いをこめて声や楽器で表現したり，拍を感じて歩いたりする活動が示されていた．

小学校第1学年の音楽の教科書では,「声」「身体」「楽器」の複数を組み合わせながら表現する活動が示されていたが，それぞれを単独で用いた表現活動を経験した後に,組み合わせて活動するという風に,段階を追って活動が展開していた.架け橋期の幼児・児童にとっては，すぐに複数を組み合わせた表現をすることは困難であると考えられる.「声」「身体」「楽器」のそれぞれを単独で用いて表現することにより音楽表現活動が容易になり，楽しさを感じることができる幼児・児童が増えるであろう．また，表現する手段を変えることにより，様々な楽しさを味わうことができるだけでなく，繰り返し同様のリズムや曲を経験し音楽的な力の育成にも繋がると考えられる．

また，第1学年の音楽の教科書は絵本感覚の教科書となっており,「遊び」の楽しさや「まねる」を通じた友達や先生との交流の中で，音楽に親しみ，音楽経験を積み重ねることができるよう工夫されていた．加えて,「つくる」の活動を題材の最後のあたりに設定していることが多く，学習したことを用いて自分なりに表現する機会を大切にしていた．これは，主体的に表現し，友達と対話的に活動する中で，深い学びに繋げることをねらった工夫と考えられる．

筆者の内数名は，幼児期の子どもを対象とする保育者養成に音楽面で関わっているが，本研究において分析した架け橋期の後半1年間となる小学校第1学年における音楽活動も，幼児期における音楽活動の要素と変わりがないものであった．徐々に複雑な活動になっていくとは言え，それぞれの活動で取り組んでいるパーツは，幼児教育においても小学校教育においても同様であると考えられる．架け橋期の幼児･児童を指導する保育者･小学校教諭にとっては，本研究で明らかにした諸要素や表現を含め，支援すべき子どもの音楽活動は同様なものであると考えられる．

このことは，幼児と児童が，同じ音楽活動を共に楽しむことのできる可能性を示唆しており，架け橋期における幼児と児童の交流において，音楽活動を取り入れる有用性を指摘することができる．小学校学習指導要領においては，幼児期の教育と小学校教育の接続について，生活科を中心として取り組むこととされており，加えて，入学当初は，生活科を中心とした他教科との合科的・関連的な指導について工夫するよう示されている．今後,架け橋期の幼児･児童の交流活動における音楽活動の導入について，生活科と音楽科の合科的・関連的な指導といった観点からも検討をしていくことが肝要であろう．

他方，幼児教育と小学校教育の相違としては，幼児教育では子ども一人一人が主体的にする音楽表現を重要視しており，小学校教育では小学校学習指導要領で示された音楽科の目標の達成に近付けることを重要視している点にあると考えられる．本研究の成果を踏まえると，幼児を対象とする保育者には，幼児が主体的に取り組んだ音楽表現を大切にするだけでなく，幼児が用いなかった音楽表現を補完したり，幼児期に様々な音楽表現を経験できるようにしたりする力が求められると考えられる．小学校教諭には，小学校学習指導要領で示された音楽科の目標が達成された状態に導くために，様々な音楽活動を適切に配列する力が求められると言える．

架け橋期の幼児・児童と関わる保育者と小学校教諭とに求められる力には，このような違いがあるものの，音楽活動を指導・支援する上で，①音楽の基礎と，②子どもへの理解の2点が必要なことは同様であろう．音楽表現に関する諸要素をとらえ，指導に繋げるためには,まず音楽に関する基礎的な知識･技術を持っておくことが望ましい．また，各家庭においてピアノ等の音楽経験が異なることを含め，幼児・児童の実態を理解したうえで指導・支援することも求められる．それらの上で，架け橋期の幼児・児童を指導する際には,「楽しみながら」音楽をするという意識を大切にし，その楽しさを伝えることが重要となると考える．

本研究では，小学校第1学年で使用されている2社の教科書を比較することで，幼保小の架け橋期における2年間の教育に携わる人材育成に使用可能な音楽表現に関わる資料を作成した．今後，保育者養成校での音楽に関する授業内容を対象に，今回作成した資料を基に小学校音楽科での学びとの繋がりを検証する等，幼保小の架け橋期における円滑な接続に資する人材の養成について検討していくことが課題である．

注

†1）岩佐と堀内[14]の論文の中では，教育芸術社の音楽科の教科書に示されている内容を分析する際に，「単元」という用語を用いているが，教育芸術社[21]及び教育出版[22]の作成した資料では，「題材」の用語が用いられているため，本論文内では「題材」を採用し，本論文内ではその表記を「題材」で統一するようにした．

†2）1)と同様に，教育芸術社[21]及び教育出版[22]を用いて，教科書の目次に示されている文言が「学習のめあて」に相当するものであることを確認した．

文　　献

1）文部科学省：幼稚園教育要領＜平成29年告示＞．初版，フレーベル館，東京，2017.

2）内閣府・文部科学省・厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領＜平成29年告示＞．初版，フレーベル館，東京，2017.

3）厚生労働省：保育所保育指針＜平成29年告示＞．初版，フレーベル館，東京，2017.

4）文部科学省：小学校学習指導要領＜平成29年告示＞．初版，東洋館出版社，東京，2018.

5）文部科学省：幼保小の架け橋プログラム．
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.html，2023.（2023.9.1確認）

6）中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会：学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について―幼保小の協働による架け橋期の教育の充実―．
https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_youji-000028085_2.pdf，2023.（2023.9.1確認）

7）四童子裕：保幼小の接続と音楽教育の変遷―保育所保育指針と幼稚園教育要領・小学校学習指導要領の比較から―．中村学園大学発達支援センター研究紀要，12，15-24，2021.

8）桐岡亜由美：領域「表現」から小学校音楽科をつなぐ幼小接続の一考察：幼稚園教育要領及び保育所保育指針，幼保連携型認定こども園保育・教育要領と小学校学習指導要領を基に．保育研究，51，28-37，2021.

9）安藤江里：伝承遊びとしてのわらべうたを再経験することの初等教員養成における有用性―幼小接続の視点から―．教育総合研究，1，1-17，2017.

10）樫下達也，平井恭子，櫨山ゆかり，高野史朗，中東静香，古賀松香：子どもと楽器の出会いのプロセス―幼稚園の音楽活動と小学校器楽教育の接続に着目して―．京都教育大学紀要，137，173-189，2020.

11）櫻井琴音，早川純子：幼小接続期における「共通事項」に着目した歌唱教材の研究．西九州大学子ども学部紀要，9，77-86，2018.

12）坪井眞里子：鑑賞教材における音楽的要素・イメージを観点とした一考察―幼小接続を視野に―．名古屋女子大学紀要．家政・自然編，人文・社会編，66，213-224，2020.

13）長谷川恭子：保育および初等教育における幼小接続を目指した〈鑑賞〉についての一考察―保育における〈鑑賞〉の在り方を視点として―．秋草短期大学紀要，35，79-90，2019.

14）岩佐明子，堀内詩子：小学校音楽科導入期の音楽科教材に関する一考察―幼保小接続の視点から―．京都文教大学こども教育学部研究紀要，1，87-103，2021.

15）坪井眞理子：小学校第1学年音楽科教材から読み解く，幼小接続の一考察．名古屋女子大学紀要　家政・自然編　人文・社会編，67，107-120，2021.

16）花輪充，佐藤隆弘，梁川悦美，柿沼芳枝，渡部晃正，細田淳子：幼稚園教育要領の改訂と教員養成校の課題 ―5領域から考える―．東京家政大学教員養成教育推進室年報，5(1)，29-38，2018.

17）教育芸術社：小学生のおんがく1．教育芸術社，東京，2022.

18）教育出版株式会社：小学音楽おんがくのおくりもの1．教育出版株式会社，東京，2022.

19）福岡市教育センター音楽科研究室：聴き取り，感じ取ったことを表現に生かす音楽科学習指導の在り方―動作化・可視化・言語化を組み込んだ授業展開を通して―．平成27年度研究紀要（第980号）．
http://www.fuku-c.ed.jp/center/report/tyousa/h27/ongakug-ken.pdf，2016.（2023.11.15確認）

20）鳥越有実子：リズム遊びと表現遊び．編著者代表：橋本勇人，幼稚園教諭・保育教諭をめざす人のための教育学入門，初版，大学教育出版，岡山，184-188，2020.

21）教育芸術社：令和2年度用小学校音楽年間学習指導計画作成資料更新版．
https://www.kyogei.co.jp/2020shou/document/r2e-nenkei1new_v3.pdf，2020.5（2023.11.28確認）

22）教育出版：令和2年度版『小学音楽おんがくのおくりもの1』年間指導計画（案）．
https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/2020shou/ongaku/files/r2ongaku1_nenkei_2003.pdf，2020.（2023.11.28確認）

（2023年11月30日受理）

A Study on Musical Activities of Young Children in the Bridging Period and the Teaching of Music in Elementary Schools: Using the Materials Covered in the First Grade Textbooks of Elementary Schools as an Example

Kikuko DATE, Noriko AOI, Hayato HASHIMOTO,
Tomoyuki NAKAGAWA and Hiroko OKAMASA

（Accepted Nov. 30, 2023）

Key words : bridging period, early childhood music activities, elementary music course instruction, textbooks, teaching materials

Abstract

The purpose of this study was to create materials related to musical expression that can be used for the effective development of personnel involved in the two-year bridging period between preschool and elementary school (the two years between the older children in early childhood education facilities and the first grade of elementary school). To this end, textbooks from two representative companies used in the first grade of elementary school were compared and examined for each unit. Based on the elements of “listening,” “feeling,” and “expression” related to musical expression, we analyzed the means of musical expression and the content of activities, and confirmed that learning progresses through activities that incorporate fun and enjoyable play. Based on this, we believe that the abilities required of caregivers and elementary school teachers who work with infants and children in the bridging period are to have basic knowledge and skills related to music, to understand infants and children, and to guide and support them with an emphasis on their awareness of music while having fun.

Correspondence to : Kikuko DATE

Departmemt of Medical Welfare for Childen
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail：date@mw.kawasaki-m.ac.jp
（Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.2, 2024 249－259）